

期 日：12月11日（水）

場 所：1年F組

司会者：森元 弘毅

記録者：畠山 瑠美子

1. 指導・助言の先生の紹介・・・高校教育課指導主事 柏谷 浩樹先生

2. 授業者（三浦 玲先生）から

生徒の実態に合わせた単元目標を設定し、作品を味わうという点に重点を置いた授業を組み立てた。深く読解をすることはできていたが、意見はひとつのものに集約された形となってしまった。多様な意見を掬い上げ、作品の面白さに触れることができればよかった。

3. グループ協議報告

Aグループ（伊藤直哉先生〔司会〕、瀬戸井先生、牛丸先生、工藤先生、小野寺先生）

発表：瀬戸井先生

〈良かった点〉

- ・授業準備がよくなされており、役割分担など授業の中でも指示が的確であった。
- ・ワークシートが考えやすいように工夫されていた。
- ・グループでの話し合いが途切れることなく活発になされ、担当が役割をきちんと果たしていた。
- ・発表に対して根拠に関する質問が出ていたのが良かった。

〈課題となる点〉

- ・作者の表現の工夫に関して、根拠を明確にし、その根拠と関連づけながら考えるという点についてうまくいくための工夫があれば良かった。
- ・生徒が付箋を一生懸命書いていたが、文字が細かく見えにくく、まとめるのが大変そうであった。また評価することも大変そうなため、まとめやすい形になれば良かった。
- ・授業の結論がぼやけてしまった。意見が一つに集約されてしまったため、他の意見を教師の側から誘導し、一方通行の意見にならないような仕向け方が必要であった。

Bグループ（原田先生〔司会〕、佐藤幸彦先生、秋山先生、畠山先生）

発表：佐藤先生

〈良かった点〉

- ・教具が工夫されていた。まなボードを上手に使っていた。
- ・評価の観点等、明確な指示があったので、生徒も話し合いがしやすそうであった。
- ・主体的で深い学びという点で、さらに興味が深まるような課題設定がなされていた。
- ・生徒から多種多様なまとめ方が出ていた。
- ・生徒のまなボードに線を引いたりする書き込みの様子から、読解の懸命さが見て取れた。
- ・生徒は根拠を明確にしようと努めていた。

〈課題となる点〉

- ・発表時に表現という話が出ておらず、評価の観点とつながっていなかった。また、せっかく考えた根拠が生かされていなかった。
- ・グループ活動の最後には、教師側からの多面的で広い視野から見た意見のまとめがあれば良かった。

4 指導助言（柏谷 浩樹 指導主事より）

[良かった点]

- ・表現の意図に目を向けた設定が素晴らしかった。言葉の見方、考え方を働かせるということに直結している。
- ・古典から逃さない授業であった。口語訳はゴールではなく、書かれていることからものを考え感じるの方が大切である。今回の授業は、必修修科目の国語総合であるが、言語文化という新しい指導要領に受け継がれる部分である。考えの形成、共有、解釈、精査といった文言があるが、新しい指導要領にそのまま通用する取り組みであった。
- ・まとめ方に対する指示や工夫がなされており、生徒の表現スキルが向上したのではないかと。ちょっとした工夫や雰囲気によって、生徒が楽しみながら取り組んでいた。

[課題となる点]

- ・授業のゴール、生徒から出た色々な意見をどうすれば良かったのか。オープンエンドかクローズエンドかは、目標とするところや教材によって難しい問題である。
- ・関連づけてまとめるというのが、今日の読むことの授業の目標である。評価の観点も、根拠をもとに述べているかどうかということであり、掲示の用紙をうまく書いたかどうかではない。そうした意味で、理由を尋ねた生徒の発言が素晴らしく、その後の流れを変えたものであった。こうした発言が出るのも、これまでの指導によるものと思う。
- ・また、グループの解体によって生徒に変容を確認させるという方法もある。論述、共有、リライトが、出来る生徒たちではないか。

いずれにしても、新しい古典の姿を示してくれた授業であった。三浦先生は5年目ということで、初任研の時に授業を拝見したが、非常に成長したという印象である。今後も中央高校の組織力で、若い先生を育てて欲しい。

